

アリエル

No.168

二〇〇六年新年号

発行人 井田 泉

〒六〇三―八一六四 京都市北区紫野東御所田町一七
電話 〇七五(四五二)二二八七

尹東柱の十字架

これは二〇〇五年一月一二日、同志社大学水曜チャペルアワーで話したものです。場所は神学館礼拝堂。

はじめに

私はおよそ三〇年前、この同志社の神学館で学んでいました。一九七五年、神学研究科修士課程（現在の博士課程前期）の修了生です。とてもなつかしく思います。

今日はとても寒いですが、こんな寒いときに暖房のないコンクリートの部屋に閉じ込められたら、命の危険にさらされるでしょう。今日お話しするのは、韓国・朝鮮のキリスト教詩人、尹東柱という人のことですが、彼は実際に、刑務所の独房の寒さの

中で死んでいったのです。今からちょうど六〇年前の冬のことです。

尹東柱はかつてこの同志社今出川キャンパス、英文学科の学生でした。二〇代半ばです。ところが彼は一年もたたないうちに下鴨警察署に逮捕されました。治安維持法違反——反日独立思想を鼓吹した——というのがその罪状でした。具体的には、ハンブルで詩を書いたのが罪とされたのです。日本が韓国・朝鮮を植民地として支配していた時代です。それから一年半くらい後、今から六〇年前の一九四五年の冬、二月一六日、彼は福岡刑務所で獄死しました。満二七歳でした。

尹東柱は一九一七年、中国東北部、朝鮮との境の間島カンドで生まれ、まもなく幼児洗礼を受けました。平壤ピョンヤンの崇実スンシル中学に学びましたが、同校が日本による神社参拝強制に抵

わたしたちは、わたしを遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。」ヨハネ九・四

抗したため廃校の危機に陥りました。そこで彼はいったん故郷に帰り、その後ソウルの延禧ヨンシ専門学校に入学しました。崇実も延禧も、同志社と同じくキリスト教の学校として知られていました。

「コスモス」

延禧専門学校の時代、二〇歳を少し過ぎた頃の「コスモス」という詩を紹介します。

コスモス

清楚なコスモスは
ただひとりのわたしの少女、
月の光が冷たく寒い秋の夜になれば
昔の少女がたまらなく恋しく

コスモスの咲いた庭へ たずねてゆく。

十字架

コスモスは

こおろぎの鳴く声にもはじらい、

コスモスの前に立ったわたしは

幼いころのようにはずかしくなって、

わたしの心は コスモスのこころ

コスモスの心はわたしのこころだ。

「十字架」

それから二年半ほど後、延禧専門学校を卒業する年ですが、彼は「十字架」という詩を書きました。彼には迷いとためらいがありました。卒業の後どうするかという実際の事柄。そして心の中には、イエスを信じてまっすぐに生きていきたいという思いと、とても自分は十字架に死んだイエスのようには生きられないという思いが入り乱れていたのです。

追いかけてきた日の光が

いま 教会堂の尖端

十字架にかかりました。

尖塔があれほど高いのに

どうして登ってゆけるのでしょうか。

鐘の音も聞こえてこず

口笛でも吹きつつさまよい歩いて、

苦しんだ男、

幸福なイエス・キリストにとつて

そうだったように

十字架が許されるのなら

首を垂れ

花のように咲きだす血を

暗くなってゆく空の下に

静かに流しましょう。

追いかけてきていた日の光が

いま教会堂の尖端

十字架にかかりました。

尖塔があれほど高いのに

どうして登ってゆけるのでしょうか

二三歳の尹東^{ユンドンジュ}柱は、夕日を受けて輝く

礼拝堂尖端の十字架を見つめていました。

自分はあるような高みには登って行けない。

イエスに従って苦しみを引き受けるような

ことはできない。

鐘の音も聞こえてこず

口笛でも吹きながらさまよい歩いて……

教会の鐘の音が自分を呼んでいるように聞こえる。鐘が聞こえないところまで行って、口笛でも吹きながらもっと楽な生き方をしようか。しかし遠ざかれば遠ざかるほど、いよいよイエスの思いが、またイエスへの思いが迫ってくるのです。それでまた

教会に戻って来ます。

苦しんだ男

幸福なイエス・キリストに

幸福なイエス・キリストに

とってそうだったように

十字架が許されるのなら

イエスにとって苦しみは、実はほんとうの幸福であった。名声と財産と地位を得、身の安全を確保したとしても、良心の平安は決して与えられないであろう。十字架の道は、自分で決意して獲得するものではなく、神から恵みとして与えられ、許される道である——そう知ったとき、苦しんだ男、苦難を負ったイエスの生涯は幸福な生涯であったと感じられました。

首を垂れ

花のように咲き出す血を

暗くなっていく空の下に

静かに流しましょう。

日本留学と死

この「十字架」を書いた翌一九四二年、尹東柱は日本に渡り、立教大学に入学しました。しかし思うところがあり、その秋十月に同志社大学英文学科に転入しました。彼は朝鮮の歴史、文化、そしてより具体的

にその言葉が、日本の力によって滅ぼされていく危機を感じ、自分の思いを大切に暖め、朝鮮（韓国）語で詩を書きました。その結果が、逮捕と投獄でした。ちょうど六〇年前の今ごろ、尹東柱の体は寒さに弱り切って死に近づいていたのでした。

一九四五年二月一六日未明、彼は福岡刑務所で息を引き取りました。「意味は分からないが大声で叫んで絶命した」と看守は証言しているそうです。イエスの最期とあまりにも似ています。満二七歳でした。

日本と日本人が彼を殺した。

しかし彼の同級生で親友であった文益煥ムンイクワン牧師はこう言っています。

「彼にあつてはすべての対立は解消された。その微笑にただようあたたかさに解けぬ氷はなかった。すべての人が血を分けた兄弟だった。わたしは確信をもつて言うことができる。福岡刑務所で息を引き取るとき、彼は日本人のことを考え涙を流しただろう、と。人間性の深みを見

すえその秘密を知っていたから、だれをも憎むことができなかつただろう。」

それなら、先ほど聞いたルカ福音書の言葉、イエスの十字架の上でのもう一つの言葉も、彼の叫びであったのかもしれない。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」
・三四

「星を数える夜」という詩があります。「十字架」の数カ月後に作られた詩です。その最後はこう歌われます。

しかし冬が過ぎ、わたしの星にも春が来れば

墓の上に青い芝草が萌え出るように
わたしの名が埋められた丘の上にも
誇らしく草が生い茂るでしょう。

彼は春を待たずに死にました。けれどもこの詩には春の光が、復活の光が差しています。

尹東柱の詩碑が同志社中学の隣、礼拝堂の東に立てられています。「序詩」という詩が、ハングルと日本語訳で刻まれています。

死ぬ日まで天を仰ぎ

一点の恥なきことを

葉あいにそよぐ風にも

わたしは心痛んだ。

星をうたう心で

すべての死んでゆくものを愛さなければ

そしてわたしに与えられた道を

歩みゆかねば。

今宵も星が風に吹き晒される。

尹東柱は彼の時代の苦しみの中で、自分の課題を、自分の十字架を負って生き、死にました。彼が踏んだこの烏丸今出川の地に立ち、彼が呼吸したこの同志社の空気を吸っている私たちも、今の時代の苦しみの中で、自分の課題を、自分の十字架を負って生きたいと願います。



(引用した詩は伊吹郷氏の訳を元に井田が手を加えたものです。)

尹東柱は一九一七年二月三〇日に中国東北部間島で生まれた。生後すぐ長老教会で幼児洗礼受け、平壤の崇実中学校ついでソウルの延禧専門学校（現在の延世大学校）に学ぶ。一九四二年、立教大学に留学、同年同志社大学英文科に入学。翌年、独立運動の容疑で逮捕され、一九四五年二月一六日福岡刑務所で獄死。一九九五年二月一六日に同志社今出川キャンパスに詩碑が建てられました。「尹東柱を偲ぶ会」では定期的に詩を読む集まりを続けています。

飼い葉桶の中の赤ちゃん

ルカ二・一五―二〇

天使の知らせを受けた羊飼いたちは、赤ちゃんを探しに行きました。その赤ちゃんは馬小屋の飼い葉桶の中に眠っておられました。布にくるまって飼い葉桶の中に眠っておられました。

生まれたての赤ちゃんです。温かくして守ってあげなくてはなりません。布にくるんで温かくしてあげます。

食べ物をあげなくてはなりません。でもまだ赤ちゃんなので、おっぱいをあげます。大切にお世話をしてあげます。

イエスさまを温かく包んで、おっぱいをあげて、お世話をしてあげました。

ところが不思議なことに、やがてイエスさまのほうが私たちのために同じことをしてくださるようになったのです。

包まれていたイエスさまが、私たちが温かく包んでくださいます。

「飼い葉桶」とは何でしょう。牛や羊が食べるえさを入れておく箱のようなものですね。飼い葉桶の中には食べ物が入っています。すると、飼い葉桶の中におられるイエスさまは食べ物なのか？ 実はそうなのです。イエスさまは、私たちのために食べ物のようになったださるのです。

「私の言葉をあげるから、私の心もからだもあげるから、私の命をあげるから、みんなはそれを食べて元気になりなさい。」

イエスさまは私たちを温かく包んで守ってください。イエスさまは私たちをお世話し、ご自分の命を私たちにくださって私たちを元気にしてくださいるのです。

イエスさまは私たちを迎えるために来られました。私たちがイエスさまをお迎えするとき、ほんとうにそのことが起こるので

す。イエスさまが私たちを包んでくださり、私たちを守り、元気づけてくださいますように。

(二〇〇五・一一・二四 京都復活教会)

あなたの神は あなたの王となられた

イザヤ五二・七一―一〇

「あなたの神はあなたの王となられた。」イザヤ五二・七

イエスさまの降誕をお祝いするこの日に、この旧約聖書・イザヤ書の言葉が選ばれています。王の即位。神が王として座に着かれた、という知らせを、「良い知らせ」「良きおとずれ」として伝えていきます。

これはクリスマスと何の関係があるのか。それは、イエスさまが王として、私たちのまことの王としておいでになったからです。

イエスさまがベツレヘムにお生まれになったとき、東の博士たちがやってきました。それは、新しく王としてお生まれになった方があることを星を見て知ったから、拝みに来た、というのです。博士たちは、王の誕生であるから、エルサレムの宮殿に行きました。けれどもそこには尋ね求める方はおられません。星に導かれて、博士

たちはベツレヘムの片隅にその方を見出しました。

博士らが幼子イエスさまに献げた贈り物は、黄金、乳香、没薬です。その最初、黄金は王のしるしです。黄金は金の冠をつくるもの。黄金を献げて、イエスさまを王として礼拝したのです。

実を言うと、私は王様は好きではありません。大体において王様はろくでもないことをする。力を持ち、財産を持ち、武力を持ち、権力を持って、人を苦しめ、場合によっては人をたくさん死なせてしまう。王子様は良いけれども、王様はいけない。今のブッシュとかいう人も、その種の王様の典型です。

博士たちもそのことはよく知っていました。現実の王がどんなにひどい、残酷なものであるかを知っていました。もしこの博士たちが、現実の王と親密な関係であれば、新しい王を拝みに来ることはありませんでした。博士たち、占星術の学者、当時の一級の知識人です。社会的も地位も高い。王様と仲良くしていれば、その顧問として財

産も地位も権威も確保して、人々からうらやましがられる生活ができたでしょう。しかしこの博士たちはそれをしなかった。それができなかつた。現実の王の支配の下で、どれだけ多くの人々が苦しい目に遭っているかを彼らは知っていました。その人たちのことを忘れて、自分たちだけが地位と名声と富を謳歌するようなことはできませんでした。

自分たちのためにも、多くの苦しむ人々のためにも、そのような王ではない、ほんとうの王を見出さねばならない。人を奴隷にする王ではなくて人を自由にする王を、人と物を奪う王ではなくて人のを守りその生活を支える王を、人を殺す王ではなくて人を生かすほんとうの王を彼らは求めました。人々が虐げられる痛みを自分の痛みとして知っていたから、ほんとうの王を見出してその方に王となっていたかなければ、死んでも死にきれないと思いました。それが、博士たちが遠い危険な道を旅してきた理由です。

黄金を贈り物として受けられたイエス

まは、黄金と共に博士たちの願いを受け取られました。そのゆえにイエスさまは、この世の王の道ではなく、別の道を歩まねばなりませんでした。

「ポンテオ・ピラトのもとで、わたしたちのために十字架につけられ、苦しみを受け、死んで葬られ」と、私たちがニケヤ信経で告白するとおり、イエスの生涯の道は「苦しみを受ける」道でした。苦しむ人と共にいようとすれば、自分も苦しみと迫害を避けることはできなかつたのです。

イエスさまが博士たちから黄金を受けておよそ三三年後、イエスさまは捕らえられて裁きを受けられました。紫の服を着せられ、茨の冠をかぶらされ、葦の棒を持たせられました。はるかじめの敬礼と礼拝を受けた後、ゴルゴタというところに連れて行かれ、十字架につけられました。十字架の上には「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」（ヨハネ一九・一九）と書いた罪状書きが打ち付けられていました。

博士たちが願った願いのとおり、イエ

スさまはこの世的な王とならず、庶民の、民衆の生活と魂のために歩まれました。神を愛して、人を愛して、この世のどのような力にも屈せず、ただ神のみを神として、人を守り支えるために生きられました。その結果、イエスは苦しみと屈辱を引き受けて死なれました。これが、博士たちが願い求めたまことの新しい王の姿でした。

しかしイエスは死なれても、その影響力は人々の中に残りました。イエスとの出会いによって人々の魂の中に深く、小さな火が燃えるようになりました。イエスを愛する愛、神を愛する愛、苦しむ者を愛する愛の火です。多くの人々の中に燃え始めた小さな火は、やがて時が満ちて引火して爆発的に燃え上がりました。

これが教会の誕生です。悲しみに満ちたこの地上に慰めをもたらすために、濁って混乱した世界を清め整えるために、この世の悪しき王の支配を終わらせるために、イエスさまがほんとうの王になられた。私たちを守り、治め、導かれる王なるイエスが生きて存在されるところ、

そこで人は守られ、慰められ、自由にされ
ます。それが教会の始まりです。

教会はイエスさまが王でいてくださると
ころです。イエスがまことの王であること
を味わうところ、そしてイエスが世界の王
でいてくださることを広く知らせ始めると
ころです。教会の組織も制度もそのために
あります。そうでなければ教会は存在する
意味がありません。この世の尺度や価値観
に支配されてしまうなら、教会の意味はあ
りません。イエスさまによって守られ、自
由にされ、生かされ、導かれることが起こ
ってこそ教会です。

私たちを守り、治め、導いてくださる方
がお生まれになった。この世的王ではなく、
人の悲しみと苦しみを死を知っておられ、
それをみずから引き受けられたイエスがま
ことの新しい王である。

そのことを博士たちは知り、それをあら
わしました。そしてそれより数百年も前に、
新しい王のことをはっきりと知って喜び歌
った預言者がいました。

「彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを

伝え、救いを告げ

あなたの神は王となられた、とシオンに
向かって呼ばわる。

その声に、あなたの見張りは声をあげ、

皆共に、喜び歌う。」イザヤ五二・七

イエスがお生まれになり、成長し、新し
い王となられる。

それが私たちの人生においても起こって
ほしい。

イエスが私のうちにお生まれになります
ように。そして私のうちに成長し、私の王
となられるように。

イエスが教会のうちに生まれになり、
教会のうちに成長し、教会の王となられる。

イエスが世界のうちにお生まれになり、
世界のうちに成長し、世界の王となられる。

このことを、どうか神が、私たちの間に
実現してくださいように。

(二〇〇五・一一・二五 京都復活教会)

「マリヤの賛歌」における

〈も〉の問題

日本聖公会現行祈祷書は改正から十五年

が経過しました。祈祷書改正についていく
つか提案したいことがあるのですが、その
第一は「マリヤの賛歌」における〈も〉の
問題です。

夕の礼拝で用いるマリヤの賛歌(三八
頁)の二節は次のようになっていました。

「神はこの貧しい女にも 目を留めら
れた」

この〈も〉を削除すべきだと考えます。

これはルカ福音書一・四八です。この
〈も〉はギリシア語原文にはありません。

原文の直訳を試みると「そのかたのしも
べ(女性、定冠詞つき)の卑賤(定冠詞つ
き)に目を留められた。」

これはマリヤという固有の人のその「卑
賤」あるいはその「貧しさ」という個別具
体的な事実に関心を注いで目を注がれ
た、ということを意味します。一般的なこ
とはなく、マリヤのその現実に対する神の
集中的関心がこめられています。

ところが「この貧しい女にも」というふ
うに〈も〉を入れてしまうと、神の集中的
関心が失われ、一般化してしまいます。

「この貧しい女にも」と言うのと、「神の関心がいろんな人のいろんなことにあつて、その後のほうで並列的ないし追加的にマリヤ（その事実）にも注がれた」という響きになってしまいます。

神は端的にこのマリヤのこの事実に目を留められ、関心を注ぎ、このマリヤをとおしてご自身の行動を開始されたのです。そのことが原文にはない（へも）の付加によってまったく見失われてしまいます。

マリヤ自身の思いとしては「この貧しい女にも」と感じたかもしれません。それはそれとして尊いことです。しかしそれは聖書本文とは別のことです。

私たちは聖書本文にない（へも）を付加して、勝手にマリヤを謙遜させるべきではありません。

日本語としては「この貧しい女にも」はなめらかですが、意味の上では誤訳だと思います。

なお日本聖書協会口語訳

「この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。」

新共同訳

「身分の低い、この主のはしためにも／目を留めてくださったからです。」
「同じ誤りを犯しています。」

新改訳は

「主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。」
と正確に訳しています。

このようなわずかな訳の違いに、聖書理解の姿勢が反映されます。

ところで「目を留める」は神の積極的、能動的な注視をあらわす言葉です。これは旧約聖書の出エジプト記第二章の終わりから第三章に直結しています。

神はエジプトでの奴隷生活にうめくイスラエルの民に目を留められました。苦しむ人々の現実を目を留められたとき、神の心はうずきました。行動せざるを得なくなり、行動せざるを得なくなりました。虐げるエジプトの王や貴族と、虐げられるイスラエルの民を神は均等に見られたわけではありません。

出エジプトを実現させた神が、ふたたび苦しむ民の現実を代表するマリヤの現実、

その姿勢に目を留め、救いの働きを開始されたのと、私は理解します。

このように内容上聖書のメッセージの根幹に関わる大切な箇所ですので、「神はこの貧しい女にも」の不要な（へも）が聖書本文に従って取り除かれることを願い、これについての議論が活発になされることを期待します。

○新しい年に主イエス・キリストからの恵みと平和が皆さまと共にありますように。すつかりご無沙汰しました。いろんな出会いが与えられ、現在は教会・幼稚園のほか京都教区宣教局社会部、北区まちづくり研究会、尹東柱を偲ぶ会などにも関わっています。

○国家主義の台頭と侵略・加害の歴史の正当化の洪水の中で、憲法にこめられた自由と平和への願いを新しく汲み取り実践していきたいと願います。

『アリエル』一六八号（復刊第二三号）
二〇〇六年一月二日発行。郵便振替〇〇
九一〇〇〇〇一六〇五六八「井田 泉」
<http://www002.upp.so-net.ne.jp/izayal/>
<http://blog.livedoor.jp/izayal/>
E-mail izayaya@da2.so-net.ne.jp